
リリカルボール～最強への道

龍の申し子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルボール〜最強への道

【Nコード】

N3859BA

【作者名】

龍の申し子

【あらすじ】

邪悪龍との死闘を終えた孫悟空は仲間達に別れを告げて神龍と共にこの世を去った。だが、突如現れた時空の穴に吸い込まれてしまう。これは孫悟空の新たな物語である。

プロローグ

邪悪龍との死闘を終えた孫悟空は突如現れた神龍の言葉に従い家族や仲間達に別れを告げてこの世を旅立った。

そして、雲を突き抜けた神龍の背中に乗る悟空に7個のドラゴンボールが順番に吸い込まれていく。

「あつたけえなあ〜神龍の背中……」

既に6個のドラゴンボールが悟空に吸収されている。残ったのが祖父の形見である四星球だけとなり、それが今悟空へ吸い込まれる筈だったのだが…。

「　　なんだ…!？」

『あれは……』

空間全体が震え出し、それに反応して悟空も目覚める。気が付けば禍々しいオーラを放った漆黒の穴が出現していた。

「あの穴から強ええ気を感じる…うわああっ!？」

『なっ!?!ドラゴンボールが吸い込まれていくだと…!』

穴から巻き起こる強風によって吸収した筈のドラゴンボールが悟空の体内から抜け出して次々と穴の中へと吸い込まれていくのだ。だが、四星球だけは離さないようにしっかりと両手で握りしめる。

「くっ、こいつだけはぜってえ離さねええ……うわあああああああ
あっ!!!?」

『悟空……！ いかん、あのままでは……』

しかし、更に強くなった強風によって悟空はドラゴンボールごと穴の中へと吸い込まれてしまう。それによって次元の穴が膨張し、次元の崩壊の危機を感じた神龍が赤い眼を光らせると吸い込まれる悟空の体が輝き光の線がそれぞれのドラゴンボールへと伸びていく。

『すまない孫悟空……この次元のバランスを保つ為にお前の力と記憶を封印させてもらった。取り戻せるかはお前次第だ』

やがて穴は小さくなり最後には完全に消失していた。だがそこに孫悟空の姿はない。

果たしてこれから先、悟空に何が待ち受けているのだろうか。

プロローグ（後書き）

久しぶりの執筆です。今回は辰年ということもありドラゴンボールとリリカルなのはクロスに挑戦してみました。他の作者様と比べて描写や文章が下手くそですが雰囲気壊さないように頑張りますのでよろしくお願いします。後、色々オリジナル要素が入りますので注意してください

1話 悟空と黒衣の少女

とある廃ビルの屋上に悟空は仰向けに倒れていた。だがボロボロだった青い道着は何故か新品の様に綺麗で背中には赤い棒、腰には何かが入った巾着袋が括り付けられている。背丈は子供の姿で尻尾も健在だ。

“ チュンチュン ”

「 ふああ〜…もう朝かあ〜 」

小鳥たちに顔をつつかれて悟空は目を覚ます。まだ眠いのか口を大きく開けて欠伸び目を擦ってから身体を起こした。

「 あれ？ここどこだ？ オラ山中で寝てたはずなんだけどなあ 」

意識が完全に覚醒した時、今いる場所が山でない事に気づく。

「 うわああっ！ どうなってんだ！！亀仙流の道着じゃねえ！？ 」

次に自分の服装が別のものになって驚く。悟空の記憶では起きる前は間違いなく亀のマークがついたオレンジ色の亀仙流の道着だったのだ。状況が把握できず慌てた様子で円を描くように周る。

「うわーどーしょーどーしょーどーしょー……ま、いっかあ」

さっきまでの行動が嘘のような悟空の軽い発言に小鳥たちが一斉に落下した。

“ぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐん”

「そーいや、オラあハラ減ったなあー」

恐竜の鳴き声のような音が悟空の腹から響く。それに驚いて小鳥たちはその場から飛び立ってしまう。

「よし、食いもんでも探しにいくかー」

腹を満たす為に食料を探しに向かおうとする悟空だったが。

「なんだありゃ？」

筋斗雲を呼ぶ為に空を見上げると、空中から何かが落ちてくる。

「よっ…と！ なーんだ食いもんじゃねえんか」

軽く跳躍してその何かを手掴む。そして手を開くと其処には青く輝く宝石、更に01と数字が刻まれていた。

7

“カリッ”

「かつてえ〜！ やっぱ食べねえぞお〜」

試しに噛んでみたがやはり食べられず、すぐに悟空は宝石から興味を失くす。そして今度こそ筋斗雲を呼ぼうと空に目を向けた瞬間。

「その石を渡して」

背後から鋭い声が背中に突き刺さる。そして悟空が振り向くと黒いマントに黒の衣装を纏った金色の髪をリボンで左右に括った紅い瞳の少女が立っていた。

「え？ 誰だおめえ」

「……………」

金髪の少女に尋ねる悟空だが、少女は答えずに黙って悟空の手に持つ石に視線を向ける。

(間違いない、ジュエルシードだ)

悟空の持つ石がジュエルシードだと確認すると、少女はゆっくりと悟空に近づいていく。

質問に答えない少女に悟空は首を傾げていたが、少女がこちらに近づいてくる事に気づくと。

“パンパン”

「きゃっ！」

「おめえタマねえから女だろ」

少女のスカートより下の下腹部に手を当てて叩いた。悟空の予想外な行動に驚いた少女はみるみると頬を紅く染めて悟空に触れられた場所に手を当てる。

普通ならセクハラ行為で訴えられるか殴られるかしてもいいのだが、幸か不幸か現在の悟空は子供の姿。それでも気の強い者ならば手を出しているだろう。

無邪気な笑みを浮かべる悟空に対し黒衣の少女は顔を紅くしたままあうあうと唸っていた。

「あうあう〜」

「ヘンなヤツだなあ。ほれ、こいつが欲しかったんだろ？」

「あうあう……え？」

唸り続けていた少女だが、悟空が差し出した手に視線が入ると目を見開く。少年の掌にある青い石は彼女が探していたジュエルシード。

「…本当にいいの？」

「ああ。オラには必要ねえかな」

しかし少女は一向にジュエルシードに手を伸ばさない。あっさりと差し出す悟空に疑問と警戒心を抱いているのだ。こんなに簡単に手に入っているのだろうか？もしかしたら罠かもしれないと感じていたがその考えは思い過ぎだったと知らされる。

「なんだ、いらねえなら捨てちまうぞ」

「ま、待って！ いるっ！ いるから捨てないで…！」

何時まで経っても受け取らない少女に悟空はジュエルシードを投げ捨てる動作を見せる。それを見て慌てた少女は叫んで悟空からジュエルシードを受け取ったのだった。

「じゃあ、私はこれで……」

「へ？ もう行っちまうんか？」

「うん……まだすることがあるから……」

「そっかあ。また会えるといいな」

立ち去ろうとする少女を明るい笑顔で見送ろうとする悟空。少女も僅かに微笑んで悟空の言葉に頷く。出会ったばかりなのに悟空からは不思議と安らぎを感じていた。

そして少女が飛び立とうとした時。

「いやあああああああつ！……」

「！？」

「なんだなんだ！」

何処からか少女の叫び声が悟空と少女のいる屋上に響き渡る。

「今の声は……」

「こっからだ！」

その声にいち早く反応した悟空は真下に視線を向ける。先程の声は二人のいる真下からのものだ。と気付いたのだ。悟空は片腕を振り上げるとコンクリートの地面目掛けて勢いよく拳を叩き付ける。

「でえりゃあああつ！！」

“バゴツ！”

すると悟空が叩き付けた拳を中心としてあらゆる方角に亀裂が入っていき、コンクリートが砕けて巨大な穴ができたが。

「うわあああつ！！」

「きゃああっ!!」

穴の中心にいた悟空と近くにいた少女も巻き込まれて穴の中へと落ちていくのだった。

1話 悟空と黒衣の少女（後書き）

本編でも書きましたが現在の悟空の衣装はGT時の青い道着と黄色いズボンと尻尾に加えて背中に如意棒と腰に布巾着の袋がついています。イメージとしては映画「最強への道」の悟空だと思ってください。後、袋の中身は今はまだ秘密です。勘の言い方にはわかると思いますが。

尚、この小説の更新は不定期になります。それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3859ba/>

リリカルボール～最強への道

2012年1月10日00時51分発行